

## 初めから知っておられる方

ヨハネの福音書 6章 60-71 節

### はじめに

イエス様は、「カペナウム」という町の「会堂」で説教をされていました。その説教をイエス様の「弟子たち」も聞いていたのです。イエス様には、イエス様が選んだ十二人の弟子たちがいました。しかしイエス様には、この十二人以外にも、イエス様とともに歩む多くの弟子たちがいたようです。今日の聖書箇所には、イエス様の説教を聞いた二つのグループの反応が書かれています。つまり「十二人以外の弟子たちの反応」と「十二人の弟子たちの反応」です。

### 1. イエスの話につまずく

60節を見ると、こうあります。「これを聞いて、弟子たちのうちの多くの者が言った。『これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか』」。イエス様のカペナウムの会堂での説教を聞いて、弟子たちの多くの者が、イエス様の説教はひどくて聞いていられないと言い出したのです。ここでの弟子たちは、十二人以外の弟子たちです。イエス様の説教を初めて聞いた「群衆」が、このように言うのなら分かります。またイエス様に敵対している「ユダヤ人たちが」このように言うのなら分かります。しかしここで、イエス様の話はひどくて聞いていられないと言い出したのは、これまでイエス様とともに歩んできた弟子たちなのです。しかも一人や二人ではありません。イエス様の弟子たちの中でも「多くの者」が、イエス様の話はひどくて聞けないと言い出したのです。

なぜでしょうか。なぜ多くの弟子たちがイエス様の説教につまずいたのでしょうか。それは、イエス様が6：53-54で、このように言ったからだと思います。「**人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています**」。ユダヤ人は、旧約聖書の律法で「血を飲むこと」が禁じられていました（レビ 17：10-11）。万が一、血を飲む人は、神様の敵となり、ユダヤ人社会から追放されてしまうのです。そのような律法があるので、イエス様が「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲まなければ、永遠のいのちはない」と言われた言葉に、多くの弟子たちがつまずいたのだと思います。イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲むというのは、聖餐式を意味しますが、聖餐式はイエス様の十字架の死を覚えるものです。その意味で、多くの弟子たちは、イエス様の十字架の死につまずいたと言えます。イエス様の死が、私たちに永遠のいのちをもたらすというメッセージに、多くの弟子たちがつまずいたのです。

「つまりいた」という言葉は、「背教する」「信仰を捨てる」という意味です。ですから66節には、「**こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとはしなくなった**」とあるのです。イエス様の周りには、いつも多くの人々がいました。五つのパンと二匹の魚を増やす奇跡をした時には、五千人の人々がいました。これらの人々は、イエス様が病人を癒す奇跡を見て集まって来た人々でした。イエス様の奇跡を見た人々は、イエス様を自分たちの王にしようと思いました。その後も、イエス様が移動するたびに付いて来て、イエス様の説教にも熱心に耳を傾けていました。その中から、イエス様とともに歩む弟子たちが起こされてきたのでしょう。しかしイエス様が、御自分の死を語り、御自分の死が、私たちに永遠のいのちをもたらすというメッセージを語り出した途端、多くの弟子たちが、イエス様のもとから離れて行ったのです。十字架のメッセージが人々をイエス様から遠ざけていったのです。

イエス様の十字架の死が、私たちに永遠のいのちをもたらすというメッセージは、キリスト教の中心的なメッセージです。多くの人々は、キリスト教の愛の奉仕に好意的です。そしてキリスト教の道徳的なメッセージにも好意的です。しかしキリスト教の核心を突く十字架のメッセージを語ると、多くの人々は深入りしたくないと言って、キリスト教と距離を取り出すのです。使徒パウロも、このように言っています。「**私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまり、異邦人には愚かなことです**」(1コリント1:23)。イエス様の十字架のメッセージは、キリスト教の核心です。このメッセージにつまりずか、それとも受け入れるかが、キリスト教の信仰の大きな分かれ道となるのです。

## 2. いのちを与えるのは御霊、父が与えてくださらないかぎり

ではなぜ多くの弟子たちが、イエス様の十字架のメッセージを受け入れられなかったのでしょうか。もちろん、ユダヤ人は血を飲むことが禁じられているというのも、一つの理由でしょう。しかしもっと深いところで、彼らがイエス様の十字架のメッセージを受け入れられない理由があるとイエス様は言われるのです。63節でイエス様は、こう言われます。「**いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです**」。「永遠のいのち」を与えるのは、御霊だとイエス様は言われます。聖霊によらなければ、私たちは「永遠のいのち」を得ることができないのです。私たちの心に、聖霊が働かなければ、私たちは十字架のメッセージを受け入れることができないのです。イエス様は、「肉」は何の益ももたらさないと言われます。ここでの「肉」とは、人間や人間的なものという意味です。私たちは、自分の力で十字架のメッセージを受け入れることができないのです。これは十字架のメッセージを聞く側のことです。逆に、十字架のメッセージを語る側のことと言えば、私たちは、自分の力で誰かに十字架のメッセージを受け入れさせることはできないのです。十字架のメッセージは、聖霊の力によらなければ、誰も受け入れることはできないし、誰にも受け入れさせることもできないのです。

その証拠に、イエス様の説教ですら、多くの弟子たちに十字架のメッセージを受け入れさせることができなかったのです。私たちは、イエス様の説教なら、誰もが受け入れ、すべてを信じると思うかもしれませんが。しかしイエス様は、64節で「**あなたがたの中に信じない者たちがいます**」と言われます。イエス様の説教でも、信じない者たちが多くいるのです。十字架のメッセージを私たちに受け入れさせるのは、あくまでも聖霊の働きなのです。十字架のメッセージの前では、「肉」は何の役にも立たないのです。どんなに頭が良い人でも、どんなに真面目な人でも、どんなに優しい人でも、聖霊によらなければ、十字架のメッセージを受け入れることはできないのです。またどんなに有名な説教者でも、どんなに聖書の知識が豊かな学者でも、どんなに情熱的で感動的なメッセージをする説教者でも、どんなにユーモアたっぷりのメッセージをする説教者でも、聖霊によらなければ、十字架のメッセージを人々に受け入れさせることはできないのです。十字架のメッセージの前では、私たち人間は、またあらゆる人間的なものは、全く無力なのです。私たちは、ただ聖霊の力を求める他ないのです。

イエス様はまた65節で、こう言われます。「**父が与えてくださらないかぎり、だれもわたしのもとに来ることはできない**」。神様の御心によらなければ、誰もイエス様を信じることができないのです。十字架のメッセージを受け入れることはできないのです。「永遠のいのち」は、父なる神様の御心によらなければ、また聖霊の力によらなければ、誰も得ることはできないのです。しかし逆に、どんなに頑なな人でも、どんなに救いからは遠く見えるような人でも、どんなにキリスト教を拒絶している人でも、父なる神様が御心とされ、聖霊の力が働けば、その人は十字架のメッセージを受け入れ、イエス様を信じ、「永遠のいのち」を得ることができるのです。人の救いの前では、私たち人間や人間的なものは、全く無力です。人間的なものを越えたところに、人の救いがあるのです。ですから私たちは、希望を失ってはならないのだと思います。人間的な物の見方で、人の救いを判断し、諦めてはならないのだと思います。人間的なものを越えたところにこそ、人の救いがあるからです。

### 3. イエスは初めから知っておられた

では、十二人の弟子たちは、イエス様の説教に対してどのように反応したのでしょうか。イエス様は十二人の弟子たちに、67節でこう言われます。「**あなたがたも離れて行きたいのですか**」。すると十二人の弟子たちを代表して、シモン・ペテロはこう言います。「**主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。私たちは、あなたが神の聖者であると信じ、また知っています**」。十二人の弟子たちは、イエス様を「主」と呼び、イエス様こそ神様から遣わされ、「永遠のいのち」を持っておられる方だと信じていました。それは、もちろん神様の御心であり、聖霊の力が働かれたからであると言えますが、それと同時に、70節にあるように、イエス様が彼らを「選ばれた」からであると言えます。イエス様が彼らを選ばれたからこそ、彼らはイエス様を離れ

ず、イエス様とともに歩むことができたのだと言えます。

しかしイエス様は70節で、続けてこう言われます。「**しかし、あなたがたのうち一人は悪魔です**」。イエス様は、御自身が選ばれた十二人の弟子の一人に、「悪魔」がいると言われるのです。その「悪魔」とは、71節にあるように、「**イスカリオテのシモンの子ユダ**」のことです。なぜなら、ユダはイエス様を裏切り、イエス様を十字架へと「引き渡す」ことになるからです。

64節を見ると、「**信じない者たちがだれか、ご自分を裏切るものがだれか、イエスは初めから知っておられた**」とあります。イエス様は、多くの弟子たちの中で、誰が信じない者たちか、誰がイエス様から離れて行くかを、初めから知っておられたのです。またイエス様は、十二人の弟子たちの中で、誰がイエス様を裏切るかを、初めから知っておられたのです。イエス様は、すべてを知っておられる方です。ヨハネ2：23以下でも、このようにありました。「**多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。すべての人を知っていたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである**」(ヨハネ2：23-25)。イエス様は、私たちの心の中もすべて知っておられます。そして、私たちの未来もすべて知っておられます。誰がイエス様を信じるか、信じないか、誰がイエス様を裏切るか、裏切らないかをすべて知っておられるのです。

「すべてを知っている」というのは、とても辛いことだと思います。イエス様は、自分から離れて行く人が誰か知りながら、その人とともに歩いていくのです。そして、誰が自分を裏切るかを知りながら、その人とともに歩いていくのです。イエス様は、ユダが自分を裏切ることを知りながら、最後の晩餐の時までユダと一緒に過ごされました。イエス様は、「あなたがたのうち一人は悪魔です」と言われただけで、誰が自分を裏切るかを十二人の弟子たちに語っておられません。ですから十二人の弟子たちは、誰が悪魔なのか、誰がイエス様を裏切るのかを知らないのです。十二人の弟子たちは、最後の晩餐の時まで、誰がイエス様を裏切るのかを知らなかったのです。ですから彼らは、最後の晩餐の時、次々に「**まさか私ではないでしょう**」と言ったのです(マルコ14：20)。最後の晩餐の時まで、十二人の弟子たちが、誰がイエス様を裏切るかを知らなかったということは、イエス様は彼らを平等に愛されたということを意味しています。イエス様は、ユダが自分を裏切ることを知りながら、ユダを他の弟子たちと同じように愛されたのです。もしイエス様が、ユダは自分を裏切るのだからと、ユダに冷たく接していれば、他の弟子たちはユダがイエス様を裏切ると気づいたはずです。しかし彼らは誰ひとり、ユダがイエス様を裏切るとは気づかなかったのです。それは、イエス様がユダを含めた十二人の弟子たちを、平等に愛されたからに他なりません。イエス様は、御自分を裏切る者を、最後まで愛されたのです。イエス様はただ一人、すべてを知っておられるがゆえの苦しみを味わいながら、愛を貫かれたのです。

イエス様は、初めからすべてを知っておられる方です。誰がイエス様を信じるか信じな

いか、誰がイエス様から離れるか、ともに歩くかを知っておられる方です。しかし弟子たちが誰も知らなかったように、私たちも、誰がイエス様を信じるか信じないか、誰がイエス様から離れるか離れないかを知らないのです。知らないからこそ幸せだと言えることもあると思います。知らないからこそ、最後まで諦めないということができると思います。私たちは、誰がイエス様を信じるか信じないか知らないのです。誰がイエス様から離れるか離れないかを知らないのです。だからこそ、自分たちで勝手に決めつけて、この人は信じないとか、この人は離れてしまうとか、諦めてはならないのだと思います。最後まで私たちに分からないのですから。どんな人でも、神様が御心とし、イエス様が選び、聖霊の力が働かれるのなら、イエス様を信じ、イエス様とともに歩み、「永遠のいのち」を得ることができるのですから。私たちは、知らないからこそ、最後まで諦めずに、希望を失わずにいることができるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たち人間は、自分の救いや他人の救いに対して全く無力です。私たちの救いは、父なる神様の御心とイエス様の選びと聖霊の働きによります。私たちには、誰が選ばれているのか、誰がイエス様を信じるのか、誰が永遠のいのちを得るのかは分かりません。しかし主よ、あなたはすべてをご存知です。すべてを知っていることの痛みをも、あなたは経験されています。私たちは、知らない幸いを思わせてください。知らないからこそ、最後まで諦めずに、祈ることができますように。最後まで諦めずに、福音を伝えることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。